

自分の名前に「ゼミ」が付くということ

第3期OB 森岡 耕作

この度、東京経済大学経営学部に専任講師として着任いたしましたこと、ご報告申し上げます。これに際して、小野晃典先生をはじめ、先輩、同輩、そして後輩の皆様にご多大なご助力ご支援賜りましたこと、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後とも何卒ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

さて、本題。冒頭で述べたとおり大学教員としての第一歩を踏み出したわけですが、初年度よりゼミ（演習）を担当することになりました。教員として右も左も分からない状況に加えて、東経大¹のゼミはいくつかの点で義塾のゼミ²とは制度的に異なっているために、当初は大変でした。第



ゼミの夏合宿@草津（著者は後列左端）

1に、東経大では2年

生からゼミを履修できます。第2に、いわゆるサブゼミ³という制度はなく、週2コマをゼミに充てることさえ申請が必要です⁴。そして、第3に、必ずしも継続が前提とされていないために、学生は各学年で自由にゼミを選択できます。小野ゼミに入会を許可されてからの8年間、義塾のゼミに慣れた私にとって、これほどまでに制度の異なるゼミをどのように運営すべきかということは、新米教員の頭を悩ませるのに十分に大きな課題でした。

¹ 東京経済大学の略称です。ちなみに、TKU（ティー・ケー・ユー）と呼ばれることもあります。語呂はよいのですが、KがKeizai（!）の頭文字であることは、あまり言いたくありません。語呂のよさを犠牲にしても、Tokyo University of Economicsの頭文字に変更して欲しいものです。

² 正しくは「研究会」です。

³ 学生の間では正規ゼミ時間外に話合いのために集まることを「サブゼミ」と呼んでいるようです。その呼び方に基づけば、学部生の頃、毎日がサブゼミだったなあ。

⁴ 通常、週1コマで運営されますが、延長を申請すれば割り当てられた1コマに連続してもう1コマ、ゼミを開講できます。しかし、その延長コマに対して単位を認めていないために、そのような延長が行われるゼミは学生から敬遠される傾向にあります。



「葵」がモチーフの
東経大の校章です。

少し脱線しますが、東経大の学生は総じてマジメです。出欠をとらない授業にも、履修者の8割強の学生が出席しますし、そればかりか、授業中に騒がしくすることは皆無です。黙々とノートをとっています。最初は驚き、感動しました。他方で、そのようなマジメさは、学力が平均的⁵かつその学内分散が小さいこと、これまでの学生時代における経験不足、およびその両方に起因して、各人が見合ったままで疎んだ状態にあるとも解釈できます。つまり、東経大の学生は、自分をうまく突出させることに慣れていないと考えられます⁶。そうしたとき、必要なことは、最小限のきっかけを与えてあげることだけです⁷。そして、その役目を果たすべきは、教員でしょう。こうして、授業時間の内外を問わず、積極的に学生にかかわってみようと思いました。結果的に、それが功を奏して、突出することに目覚め始める学生も現れてきたことはうれしい限りです。

話を戻しますが、ゼミの運営も同様でした。当初は疎んでいたゼミ生にきっかけを与えてあげるだけでよかったのです。勉強⁸の楽しさを説くのではなく、自分が楽しんでいる様子を見せる。他人がどうであれ、ゼミに全力を傾けるような、そんな青春の過ごし方もありうる⁹。端的に言えば、自分が1人のゼミ生として、ゼミを楽しんでいる

様子を見せたのです。大きな課題と思われていたゼミ運営も、こうしてなんとか軌道にのせることができました。

振り返ってみれば、新米教員1人では解決できなかったであろう大きな課題、その解決方法も学生が気づかせてくれます。いや、そもそも「解決」する必要すらなかったのかもしれない



ゼミ内講演会后、横山氏（左奥、大）を囲む森岡ゼミ生

⁵ 東経大経営学部の偏差値は、ちょうど50のようです (<http://daigakujuuken.boy.jp/indextoukyouto.html>)。

⁶ 例外的に、資格取得について言えば、学生は異常なほどの頑張りを見せています。努力の結果がわかりやすいからでしょうか…

⁷ ダブル・コンティンジェントな状況を解決する方法については、社会学者 Niklas Luhmann が『社会システム理論』において述べています。

⁸ 厳密には、勉強と研究（学問）とはことなりますが、つつい研究（学問）のことを勉強と言ってしまう。

⁹ そのことは私1人で伝えることはできません。そんなとき、同期の横山氏・森本氏にゼミでの講演を依頼したら、2人とも快諾してくれました。その節はどうも有難うございました！

ん。互いに学び教えあう姿、その本質を彼らが教えてくれています。慕ってくれる学生に、「森岡先生」と呼ばれることには未だに慣れません。小野先生がそう感じられたように、内心、可笑しくなってしまうはず¹⁰。しかしながら、「森岡ゼミ」と呼ばれること、また、自分でそう呼ぶことには何らの抵抗もなくなりました。ゼミ生とともに1人の構成員として、ゼミを客体として捉えることができるようになったからでしょう。自分の名前に「ゼミ」が付き、それに違和感を覚えなくなる。それは、まさに半学半教が意味することそのものなのでしょう。



ゼミ内講演会后、森本氏（前列中央、薄）を囲む森岡ゼミ生と著者（後列右端）

¹⁰ 清水猛研究会のOB会誌に小野先生が寄稿されたエッセイを、卒業間際のゼミにおいて、ゼミ生の前で朗読させていただきました。そのエッセイの中で、先生も1期生の入会に際して同様のことを感じられていたということを告白されていました。ちなみに、ゼミ生の前での朗読に際して、「可笑しい」を読めないまま大学院に進学しようとする私に、小野先生が苦笑されていたこと、今でも忘れることができません。